意味のある作業を共有することでADLの改善に繋がった事例

○津餃子（OT）[1)]・松阪牛子（Dr）[1)]・鈴鹿一朗（PT）[2)]伊勢太郎[2)]

1）△△△病院　リハビリテーション科
2）△△△大学　△△△学部　リハビリテーション学科

キーワード：COPM, ADL, 役割

【はじめに】今回，脳梗塞の発症により活動の意欲低下を呈した患者に対してCOPMを用いて目標設定をした結果，活動の意欲が向上し，ADLの改善が見られたためその介入について報告する。なお，本報告は本人に書面で説明し同意を得ている．
【事例紹介】70代女性．X年Y月Z日に脳梗塞の発症により左片麻痺を呈し，Z＋2日から作業療法介入が開始となった．入院前は主婦として家事全般を担っていた．
【評価】介入開始時，　BRSは上肢Ⅳ手指Ⅴ下肢Ⅳであった．Bathel Index(BI)は60/100点であったが，FIMは83/126点（**運動項目51点，認知項目**32点）であり，できるADLとしているADLに乖離が見られた．Vitality Index は6/10点であり，意欲の低下があった．COPMは，①料理をすることが重要度10，遂行度3，満足度2，②掃除をすることが重要度10，遂行度2，満足度1であった．
【介入経過】
まずはじめに，COPMの結果を踏まえて，料理ができるようになること，掃除が出来るようになることという2つの目標で合意した．まずはベッドサイドでの短時間の座位や立位動作の訓練から実施し，徐々に実施時間を伸ばしていった．次にリハビリ室に行き，台所に立ってお茶を入れる，味噌汁を作る，掃除機をかけるといった実際の動作訓練へ移行していった．介入開始時はリハビリに消極的であったが，徐々にリハビリの時間に合わせて身支度をして待っていてくれるようになった．
【結果】
BRSは上肢Ⅴ手指Ⅵ下肢Ⅴとなり随意性が向上した．BIは95/100点，FIMは112/126点（運動項目78点，認知項目34点）となり，ADLが向上し，できるADLとしているADLの乖離がなくなった．また，Vitality Indexは10/10点となり，意欲が改善した．
【考察】心理機能の改善のためには意味のある作業に基づく介入が有効であると報告されている（著者名，2025）．今回，COPMを用いて事例にとって意味のある作業を共有し，それに向けての訓練を行った結果，活動意欲の改善に繋がり，身体機能やADLの改善にも繋がったと考えられる．